

科目区分：大学院，科目名：臨床心理面接特論Ⅰ

担当教員：信原孝司，登録学生数：8名

自立的・自発的思考の育みと授業の双方向性を目指した授業実践

教育実践総合センター・信原孝司

1. 授業の概要

本授業は、心理臨床の専門性について、特に力動的(深層心理的)心理療法の側面から学び、理解を深めることを目的としている。また授業の到達目標は、心理臨床の専門性に関する知識を習得し、臨床心理面接への理解を深めることである。この科目は、臨床心理士を目指す大学院学生(学校臨床心理臨床心理学コース)の必修科目であり、履修者の全てが臨床心理士資格の取得を目指して履修している。

2. 授業方法・形態・内容

授業では、初回到授業内容と進行の予定をシラバスを下敷きとして提示している。これは、学生が前期の見通しを持って授業に取り組み(予習し)、関連した項目の復習に取り組みやすくなることを意図している。以下は今年度の講義内容である。

- (1) オリエンテーション
- (2) 臨床心理面接での問題理解と面接構造 1
- (3) 臨床心理面接での問題理解と面接構造 2
- (4) 生と死、ターミナルケアを考える
- (5) 臨床心理面接における技法
- (6) 精神分析について
- (7) 心理療法の初期面接
- (8) 映画を通して臨床心理面接を考えるⅠ
- (9) ディスカッション
- (10) 心理療法の基本技法 - 質問・明確化・直面化・解釈 -
- (11) 面接中期 - 転移・逆転移 -
- (12) 面接終期 - 抵抗・気づき・ワーキングスルー -
- (13) 映画を通して臨床心理面接を考えるⅡ
- (14) ディスカッション
- (15) 前期振り返り・レポート提出

3. 意識して取り組んだこと

授業では、担当者と学生とのやり取りが双方向となるように意識し、自立的な考え、自発的に発表が出来るように工夫した。例えば、

Ⅰ. 毎回の授業の最後には、学生からの質問

を受け付ける。質問には担当者が全て答えてしまうのではなく、学生達とディスカッションして考えるようにした。

Ⅱ. ディスカッションの形式を意識して用い、学生が自分の意見を発表し、自分で考える力が付くように工夫した。

Ⅲ. 授業で学んだことを振り返るために映画を用いた。共感する能力を高めて、ディスカッションで論考する力が付くように工夫した。

等である。上述した講義内容をもとに具体的な工夫を説明すると、

Ⅰは毎回の授業で行なうが、時には担当者からも発問し、受講者全員でディスカッションするように工夫した。

Ⅱでは授業の折々でビデオ映像を用い、ディスカッションしやすくなるようにも工夫した。

Ⅲでは、映画を観た翌週に臨床心理学的な観点から全体でディスカッションするようにした。また授業で受身とならないよう、自分の考えをA4用紙1枚にまとめてくるように課題を出した。

4. 総括

授業ではディスカッションが弾んで次回に延びることもあったが、授業予定を組み直す等して柔軟に対応した。またディスカッションから派生したテーマとして、(4)で「生と死、ターミナルケアを考える」を取り上げた。

(15)のレポート課題は次の3つである。

(a)授業で学んだことを踏まえ、映画をあなた独自の臨床心理学的視点から論考せよ。

(b)前期授業から臨床心理面接について学んだ点を論考せよ。

(c)授業への評価として、前期授業の実施内容・方法についての感想を自由に書いて下さい。

(a)(b)の課題によって授業全体を学生に振り返ってもらい、(b)の課題によって、自立的・自発的な考えを文章にまとめるよう促した。

(c)では、学生からの声を来年度の授業への反映を留意した。学生からは授業の実施内容・方法を評価する声が多かったが、評価に関わるレポートでもあり、伝え難い部分があったかも知れない。